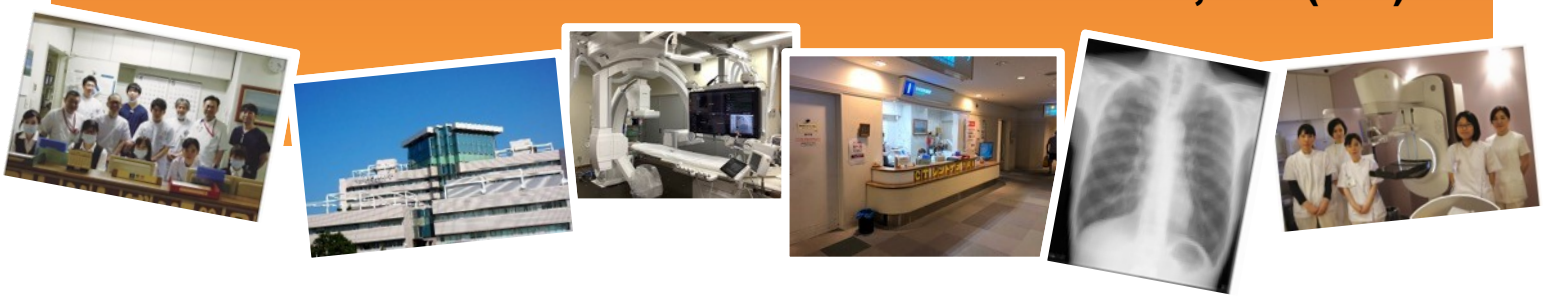
地方独立行政法人 りんくう総合医療センター

放射線　たより　＊Radiation News＊

Vol.14,2024(Oct)



地域の皆さまへ　～「放射線たより　＊Radiation News＊」をお届けします！～

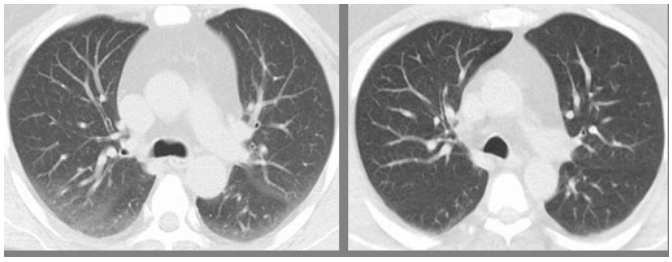
低線量肺がん CT 検診について

がん（悪性新生物）による死亡数は、近年増加傾向にあり、日本人の死因の 1 位を占めています。その中でも肺がんの死亡率は比較的高いことが知られており、死亡リスクを低下させるためには、禁煙などの一次予防とともに検診を受け、早期発見・早期治療することが大切です。現在、肺がん検診には一般的に X 線撮影が行われていますが、CT 撮影は人体の内部を輪切りの断面によりさまざまな角度から観察できるため、X 線撮影では見つけにくい小さい病変や心臓や骨、血管などに重なった病変を発見でき、肺がんの早期発見に大変有効です。

しかし、CT 撮影は X 線撮影に比べ被ばく線量が多くなるデメリットがあるので、当院では、通常の胸部 CT 撮影より被ばく線量を 1/10 程度減らした「低線量肺がん CT」を導入しています。人工知能（AI）技術を応用した画質改善を図っているため、肺がんの検出能に大きな差はありません。この検査では CT のベッド上に寝ていただき、X 線撮影と同じように撮影中は数秒間息を吸って止めていただく必要はありますが、検査前に食事を制限したり薬を飲んだりする必要はありませんので、身体に大きな負担をかけることなく検査を受けることができます。

喫煙歴がある、受動喫煙の環境にいる、家族で肺がんになった人がいるなどが当てはまれば、肺がんに罹患するリスクが高くなります。自覚症状がない方は早期発見のためにも、是非、低線量肺がん CT 検診を受けてみてはいかがでしょうか。

X 線 CT 装置



通常胸部 CT
被ばく線量: 10.9mGy

低線量肺がん CT
被ばく線量: 2.06mGy

お問い合わせ先

●りんくう総合医療センター　健康管理センター
●電話：0724-69-3111　（内線 1296）
平日　月曜～金曜　9:00～16:30

乳がんと放射線診療　－第５回　放射線治療について－

昨年の 10 月号から始まった本シリーズも、今回が最終回となります。
本記事では、乳房温存手術後の放射線治療についてお話しします。

乳房温存手術後の放射線治療について

放射線治療は、手術、化学療法と並ぶ「がん」の 3 大治療法のひとつです。乳房温存手術後の放射線治療は、日本乳癌学会の乳癌診療ガイドラインでも、標準的な治療法として推奨されています。

なぜ放射線治療が必要なの？

手術は、マンモグラフィや乳腺エコー等の画像上で確認できるがんの部分を切除することが目的です。一方、放射線治療は、手術で取りきれなかった可能性のある微小ながん細胞を死滅させることが目的です。放射線治療を受けることで、乳房内の再発リスクを大幅に減らすことができます。研究によると、放射線治療を受けた患者さんの乳房内の再発率は、受けなかった患者さんに比べて有意に低いことが報告されています。

放射線治療ってどんなもの？

放射線治療は、高エネルギーの放射線をがん細胞に照射する治療法です。乳房温存手術後の標準的な治療法は、乳房全体に放射線を照射する「全乳房照射」です。この治療法は、外来通院で行え、1 回の照射時間が短く、日常生活への影響も少ないのが特徴です。

治療期間や線量は？

放射線治療の効果は、照射する線量や回数、期間によって異なります。一般的には、手術後に残っている可能性のある微小ながん細胞に対しては、1 回線量 2.0 グレイで総線量 50 グレイ程度を約 5 週間かけて治療する方法が有効とされています。この方法により、がん細胞を効果的に死滅させながら、正常な組織へのダメージを最小限に抑えることができます。

放射線治療の副作用は？

放射線治療に伴う副作用としては、皮膚の赤みやひりつき、疲労感などが挙げられます。これらの副作用は、治療終了後には徐々に改善していきます。副作用については、医師や看護師にご相談ください。

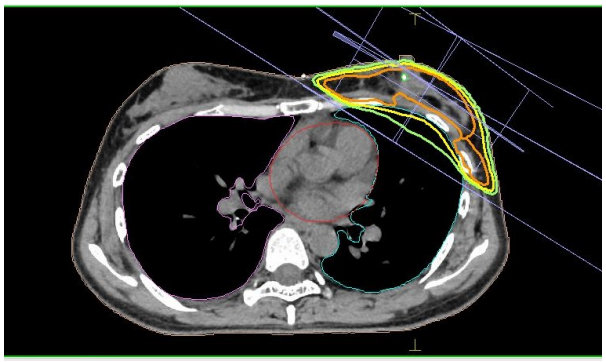
放射線治療は怖い？

放射線治療は、外科手術と比較して身体への負担が少なく、入院不要なことも多い治療法です。治療中も、医師やスタッフが患者さんの状態を細かく確認しながら治療を進めていきますので、ご安心ください。

まとめ

乳がん治療における放射線治療は、再発を予防するための重要な治療法です。また、外来通院で受けられるなど、生活の質（QOL）への影響が比較的少ないことも特長です。乳がんと診断された方は、医師と相談しながら、最適な治療法を選択することが大切です。

放射線治療装置



治療計画画像

編集後記

本号では、CT 検診と放射線治療という、一見異なるテーマを取り上げました。しかし、予防と治療という二つの異なる視点からのアプローチではあるものの、どちらも根底にあるのは「がん」という病気に対しての向き合い方です。この広報誌が、読者の皆さまにとって、がんに対する理解を深め、健康への意識を高めるきっかけになれば幸いです。（田原）

放射線たより（Radiation News）
放射線科・放射線治療科・診療支援局放射線部門
発行責任者：中田耕平（放射線ｾﾝﾀｰ　ｾﾝﾀｰ長）
編集責任者：中前光弘（放射線ｾﾝﾀｰ　副ｾﾝﾀｰ長）
編集委員：田原大世,安永桂介,池本達彦,梅木拓哉,
今西麻梨子,髙橋美帆,奥田響生,山本佑樹
Vol.14　発行日：2024 年 10 月 01 日